「日々の理科」（第 1836 号）　2019, -7, 19

「シジュウカラの営巣（11）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

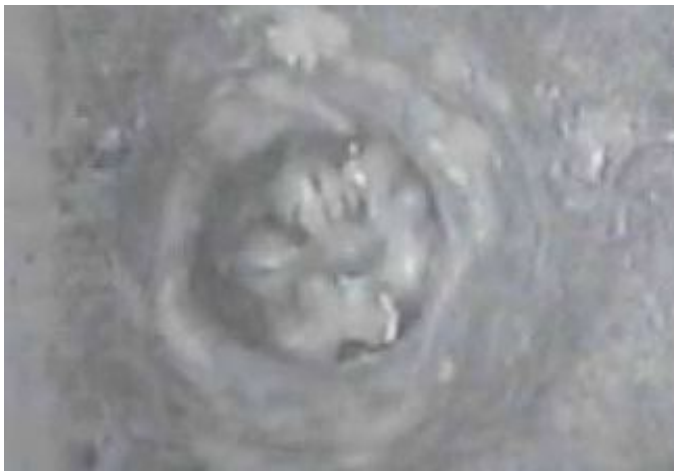
田中　千尋　Chihiro Tanaka

ヒナが孵化すると、親鳥は大忙しになる。母親鳥だけでなく、父親鳥も子育てに参加、時には一緒に餌の幼虫を運び込むこともある。なかなかの子煩悩だ。しかし今回はこれでも楽なほうだ。生まれたヒナが５羽か６羽に過ぎないからだ。時には 11 羽になることもあり、そうなると餌が不足して、あとから孵化したヒナは、育たずに死んでしまうこともある。

小さなヒナでも糞はする。糞はどうするかと言うと、親鳥がくちばしでくわえて、外に運び出す。ヒナも親鳥がつまみやすいように、お尻を上げて、風船のように糞を出す。写真の白く写っているのが糞で、だいたい餌をもらったヒナが、その直後に糞を出して持ち運んでもらうことが多い。糞が白くて目立つので、親鳥もすぐに認識できるのだろう。

孵化から 10 日目ぐらいまではヒナが小さく、保温が必要なので、夜間は母親鳥が産座に覆いかぶさって、そのまま朝まで動かない。ヒナが潰れてしまわないのかと心配になるが、うまく隙間を作っているのだろう。

今回は７卵のうち１つが孵化せず、６羽のヒナが育っている。親鳥が餌を持ってきて、ヒナが一斉に口を開けた一瞬が、ヒナの数を数えるチャンスになる。



孵化から４～５日経つと、ヒナの背中に「ウリ坊」のような模様が現れる。羽毛が生えてきたのだ。同時に翼も少しずつ形成される。驚くべき急成長だ。